

下関市国際交流員 李 佳琦  
(中国山東省青島市派遣)

「注文の多い土地（後編）」

(4) 晴天

肥料を撒いた後、十人の少年は田んぼに浮かぶ文字に従い、鉄製フレームと温室フィルムでフラワーハウスを作り、4000鉢のバラの花を整然と並べ、鶏小屋と羊小屋も建て、鶏と羊の養殖を始めました。



4000 鉢のバラの花の運搬車



フラワーハウスと「バラ王子」と呼ばれる驚卓（驚二）



鶏小屋と何浩楠（楠八）、蒋敦豪（敦一）



羊小屋と趙一博（博五）、蒋敦豪（敦一）

「いろいろ注文が多くて大変だったでしょう。お気の毒ですが、もう少し頑張ってください。」

そのような注文の多い土地であるにも関わらず、少年たちは力を合わせ、様々な困難を幾度となく乗り越えてきました。

定期的に小麦に肥料を撒いて除草するほかに、花と野菜の栽培、小屋の建設、動物の養殖も始めたので、栽培組、建設組、養殖組と分けて作業を進めるようになりました。

すると養殖組の羊小屋の上空にまた新しい文字が浮かび上がりました。

「妊娠中の雌羊の出産を手伝いたまえ！」

みるとたしかに羊の中には、妊娠中の雌羊が何頭もいるようでした。

「でも手伝うといっても、何をすればいいの。」養殖組のメンバーである博五と楠八から聞かれると、リーダーの敦一は少し考えこう答えました。

「これは素人には非常に難しいだろう。交代で見張りする必要があるから、今晚は私が見張るので、二人はぐっすり休んで朝の番を頼む。」

博五と楠八は見張り番を敦一に任せて、小屋に戻りました。敦一は椅子にも座らず、羊小屋の前であぐらをかきつつ異変に備えました。

嵐が来る前の曇天模様、かなり寒い夜の中、羊たちは不安そうにメエーメエーと鳴きながら、羊小屋で騒いでいました。

案の定、一頭の雌羊が出産を迎えました。

羊の助産については予め勉強しましたが、本番になるとやはり緊張します。その雌羊は、痛々しい姿で羊小屋を走り回り、メエーメエーと鳴き声を上げていました。難産で苦しんでいる様子です。

最初の仔羊は死産で、もう一頭が母羊のお腹にいるようですが、ちっとも産まれる気配がありません。

「どうしよう、どうしよう。」敦一は深呼吸して、潔癖症をよそに、長い手袋をはめた手を雌羊のお腹の奥まで届け、仔羊を引っ張ってきました。



その仔羊は胞衣のまま、死んでいるかと思われるほど微動だにしません。真っ青な顔をした敦一は仔羊を手でわしゃわしゃしながら、何とかして救ってあげようと頑張っていました。

それでも、仔羊は敦一の懷に倒れ、呼吸も感じられないぐらいでした。

「なかなか目を開けてくれない。手遅れか。」敦一は手袋も服も血まみれであるにも関わらず、ただひたすらに仔羊をわしゃわしゃしました。はじめて助産した仔羊を、どうしても死なせたくないようでした。

すると、羊の鳴き声に起こされた博五と楠八も羊小屋の方に来ました。そのとき、仔羊の小さなひづめがピクッと動いたのに気づきました。

「生きてる！まだ生きてる！」二人は大急ぎで、敦一の抱えた仔羊を助けにきました。嵐が来る寸前、ごろごろと雷が鳴る中、三人は小雨を冒して、一生懸命仔羊の命を取り戻しました。

日の出から日の入りまで一日中苦闘して、やっと死神から仔羊を奪い返した三人は、ぐったりと寄りかかり、火のように燃える夕焼けを眺めながら、仔羊にミルクをやりました。



「命というのは、神聖なものだな。」仔羊の出産を手伝ったときの緊張感と恐怖感で頭の中が真っ白になった敦一は、やっと気を取り直しました。胸をなでおろして安堵したように、長い息を吐きました。

「いつの間にか晴れちゃってるね。」楠八は仔羊の小さな尻尾を撫でて言いました。

「いいね。いい兆しだ。きっと。」博五は先に立ち上がり、背伸びをして太陽の沈む方向に目を向けて提案しました。

「兄貴、その仔羊に名前をつけるといい。」

「それだ。おれも思った。」楠八も飛び上がって賛成しました。

「名前ねえ。」敦一は空っぽになるミルク瓶を手を持って、少し考えていると、はっとひらめき、遠ざかる嵐を眺めてこう言いました。

「この子のことを、『晴天』と名付けよう。」

## (5) 万里無片雲

世と隔絶した後陡門 58 号にも春が訪れました。

緑色に染まった小麦の苗はそよ風に吹かれ、楽しそうに踊っているように身を揺らいでいました。

注文の多い土地にも、注文の頻度が低くなり、少年たちは一息ついていました。

「ああ、細かなところまでよく飾ってくれたね。ところでこの絵は何？」耕三は柵作り用の竹を持ったまま、地面に金色のペンキで大きな絵を描く童七に話しかけました。

「『星の王子さま』だよ。『肝心なことは目では見えない』というセリフの、それだ。」童七はブラシで丁寧に王子様のバラを描いていました。

ちょうどその時、鷲二はバラの鉢を持って庭に来ました。

「もうすぐバラの販売が始まるから、庭全体を貸してもらって。箱詰めするのにスペースが必要だから。」庭の隅っこにバラを入れる箱が 4000 個積んであり、バラの鉢も庭の縁から並べてありました。



「わかった。ペンキを乾かすから 2 時間ちょうだい。」童七の話が終わらないうちに、鷲二は大きな叫び声を上げました。

「晴天ちゃん！花びら食べちゃだめ！」

バラの花びらを口にくわえた晴天は、鉢が並んでいる庭から部屋にいる敦一のところへ逃げました。



「ごめんごめん、寝ちゃった。」部屋から敦一の枯れた声が聞こえてきました。何やら晴天にミルクをやるときに居眠りしてしまったようです。

「晴天ちゃん、だめ。鷲二おじさんのバラ食べちゃったら売れなくなるよ。お金がないとミルク代はどうするの。ねえ～わかった？」説教口調で晴天を叱

るふりをした敦一ですが、いかにも親バカの顔をしていました。そんな敦一に、鷺二はすぐつつこみました。

「誰がおじさんだ！このくそおやじ！」

「おまえだよ。鷺二おじさん。うちのプリンセス晴天をいじめるな。」同じく養殖組の博五と楠八がそろって拳を振り上げました。

「ぼくのプリンセスバラたちも大事に育てられたのに！」鷺二はバラの鉢を抱えしっかりとバラの様子を見ましたが、楠八に引っ張られました。

「はいはい、鷺二おじさん、ちょっと退いてくれる？プリンセス晴天はお出かけするから邪魔ですよ。」

「なに！なんかムカつく！」鷺二の叫び声も届かないようです。

このような騒ぎの中、敦一は晴天を連れ、庭に出てきました。

「ボクの晴天ちゃん、愛おいしい晴天ちゃん、今日もお元気ね～お散歩よ。」

自ら出産を手伝い、死神から命を取り戻した晴天ちゃんに対して、敦一はまるで父親のような気分を覚えました。晴天ちゃんも目を開けたときからずっとそばにいてくれる敦一のことを親だと思っているかのように、敦一に懐いで、いつでもついてきます。

「子どもを甘やかすパパね。」年玉ちゃんを連れてお散歩から帰ってきた昊四はニヤニヤしながら、敦一に言いました。

「年玉のことをさんざん甘やかすくせに。」童七はペンキとブラシを片付けながら言いました。昊四と同じ部屋に住み始めてから、何度も年玉ちゃんにマットレスを噛まれたり、シーツを噛み砕かれたりされたため、年玉ちゃんをブロックリストのナンバーワンにしたそうです。

「それは年玉ちゃんの愛の表現だから！」昊四は顔を赤くして言い訳口調で言いました。



「ベッドにおしっこされるよりはマシだろう。」片方の手は汚れたシーツ、もう片方の手は壮ちゃんを腕に抱えた珩十の襟を掴みながら、沅六はうんざりした顔で通り過ぎました。

「ごめんごめん。きれいにするから、放して。」珩十が暴れば暴れるほど、沅六はぎゅっとしっかり掴んでいきました。

「ふざけるな。もう3回目だろう？ボクのベッドで寝るぐらいなら別にいいけど、おしっこはくさいって。」みんなの前で、沅六は珩十に怒鳴りました。



「ごめん。壮ちゃんをちゃんと説教するから勘弁して。」珩十は上目遣いで沅六におねだりしましたが、まったく効きませんでした。

「壮ちゃんをしつけてって言ったじゃないか。また悪いことをしたらお前達二人、いや一人と一匹揃って湖に投げてやるっていう約束だから覚悟しろ。」沅六は本気の顔で、珩十と壮ちゃんを引っ張って湖の畔へ向かっていきました。

「ほらさ、甘やかすなって。親子そろって鬼沅六からやられるぞ。」童七はまじめなふりをして、昊四に注意しました。

ところが昊四は完全に童七の話を見做して、軽やかなメロディーを口ずさみながら、「いい子だね」と年玉ちゃんの頭を撫でています。

むしろ近くでお散歩をしていた敦一の方が反応し、晴天ちゃんの耳をおさえると、目をむいて童七に怒鳴りました。

「こら、子どもを脅かすな！」

## (6) 夜の嵐

夏の雰囲気を感じられる季節、小麦畑には黄金色が広がりました。



土地からの注文が多くて大変苦労していましたが、少年たちはすっかり後陸門 58 号の生活に慣れてきました。晴天ちゃんも以前よりすっかり元気になったようで、体も少し大きくなりました。

親バカと言われた敦一は、いつも泥だらけの服を着ていましたが、かわいいプリンセススカートは何着も晴天ちゃんに買ってあげました。

また、お寺から長命鎖<sup>1</sup>を授かり、丁寧に晴天ちゃんの首にかけました。

「ミルクをいっぱい飲んで、どんどん大きくなってね。」敦一はプリンセススカートを着て長命鎖をつけた晴天ちゃんをわしゃわしゃして、親口調で可愛がりました。

その日もいつも通りに、少年たちは各自の仕事で忙しくしていました。

晴天ちゃんの寝どこはツールボックスの隣にあり、道具を取りに来た珩十は首をかしげた晴天ちゃんに惹かれました。

「プリンセス今日もかわいいね。自分の新作を聞かせてやるか。」と、自分もかわいい虎模様の帽子を被っているのに晴天ちゃんのことをかわいいと褒めた珩十でした。晴天ちゃんにミルクをやりながら、珩十は柔らかい声でオリジナルの新曲を歌いました。



「どうだい。自分の自信作だから、晴天ちゃんも気に入ってくれたね。」晴天ちゃんを持ち上げ「高い高い」をしていると、晴天ちゃんはふわっとした尻尾を小さく揺らし、楽しそうにメエーメエーと鳴きました。

そのとき、博五が部屋に入ってきました。

「あ、いた。耕三が怒ってるぞ。道具はまだか、珩十はどこで油売ってるのかって。」道具のことをすっかり忘れていた珩十は慌てた声で「しまった」と叫び、晴天ちゃんを博五に渡すと、道具を手に取り小走りで耕三のところへ戻りました。

ふわふわの毛に手を触れられて、博五もつい「高い高い」したくなりました。

忙しい畑生活の癒しと言えるほど、みんなは晴天ちゃんを愛していました。

しかしながら、天に不測の風雲あり、世の中は変転極まりないというように、

---

<sup>1</sup> 南京錠の形をした銀製の首飾り、ペンダントをつけて首に掛ける。子どもの長生きを願うもので、普通は生後 100 日の祝いに親戚や友人から贈られることが多い。

災いはいつも突然やってくるものでした。

「どうもおかしいぞ。」敦一は言いました。

晴天ちゃんが息苦しそうな顔をしていました。

「ぼくもおかしいと思う。」鷺二は眉をひそめて言いました。

「喉に食べ物が引っかかっているみたい。ハイムリッヒ法わかる？」白目になるほど苦しんでいる晴天ちゃんを両手で抱え、ハイムリッヒ法を試す敦一を、鷺二が助けてみたが、だめでした。



「たしかそれは人間用の……」鷺二は声を潜めて、車の鍵を手に「とりあえずぼくが運転するから病院行こう」とアドバイスしました。

一番近い動物病院まで通常は30分かかります。鷺二はアクセルを強く踏みスピードを上げましたが、それでも15分かかりました。

「その、ぼ、僕らが……」がたがた震えだし、敦一は息が止まった晴天ちゃんの体をぎゅっと抱きしめると、もうものが言えませんでした。

「この子を救ってください。」二人の真剣な顔を見て、もう手遅れだとわかっていても、その医者は晴天ちゃんを病床まで連れていき、検診をはじめました。

しかし奇跡は、起きませんでした。

沅六と珩十が駆け足で病院に入ったとたん、椅子に置かれた黒い袋がふいに目に入りました。

それがどういう意味なのか、すぐ理解できました。

無言のまま立ち尽くす二人に、「座って」と敦一が言いました。一見すると落ち着いた声ですが、語尾が少し震えています。

二人は座ることなく敦一に聞きました。

「晴天ちゃんをちょっと見てもいい？」

敦一は頭を軽く横に振って、黒い袋を懐にぎゅっと抱きしめました。



「あまりかわいくないから。」

いつもピンク色のプリンセススカートとピカピカの長命鎖をしたかわいい晴天ちゃんの今の姿を人に見せたくないという、我が子想いの親心でした。

「死因は？」沅六は鼻を吸って聞きました。

「先天性心臓病。毎日、呼吸するだけで苦しかったらしい。」

沅六は両手で顔を覆い、肩を震わせ、何も言うことができませんでした。



すると鷺二はやさしい眼差しで、「兄貴を一人させよう」と合図を出し、二人の弟を連れて病院の外に出ました。

「兄貴が晴天ちゃんに人工呼吸をしたとき、本当に心を揺さぶられた。潔癖症だというのに。」鷺二の低い声に、複雑な心境が入り混じっていました。

「そんなに苦しいのに、敦一パパにはいつも走ってついていたね。晴天ちゃんは。」鷺二の話は、ちょうど後ろに来た敦一の耳に入りました。涙をこらえて、敦一が言いました。

「納棺師に頼んで、晴天ちゃんを納棺してもらい火葬する。」

博五と楠八が着いたとき、晴天ちゃんは納棺師によってきれいにされ、花柄の毛布に置かれたところでした。

一緒に晴天ちゃんの命を取り戻した仲間なので、晴天ちゃんを見た瞬間、博五と楠八は涙を禁じ得ずしくしくと泣き出しました。

少年たちは次々と病院に駆けつけ、晴天ちゃんの最期を見送りにきました。

花びらに囲まれた晴天ちゃんは、生きているかのように、ぐっすりと棺に眠っていました。

少年たちは声を殺し、納棺師の動きをじっと見つめながら、晴天ちゃ



んを永遠に失ったという残酷な現実に向き合いました。

すると、火葬炉に晴天ちゃんが入る瞬間、ごろごろと雷の音が聞こえてきました。

嵐の夜。まるで天の神様まで晴天ちゃんを悲しんでいるかのように、雷が少年たちの泣き声を遮り、滂沱<sup>ほうだ</sup>の音しか聞こえませんでした。

ピンク色の骨壺を渡されると、敦一は丁重に捧げました。

突然閃き落ちた稲妻に照らされた敦一の横顔には、なんと寂しげな笑顔が浮かんでいました。

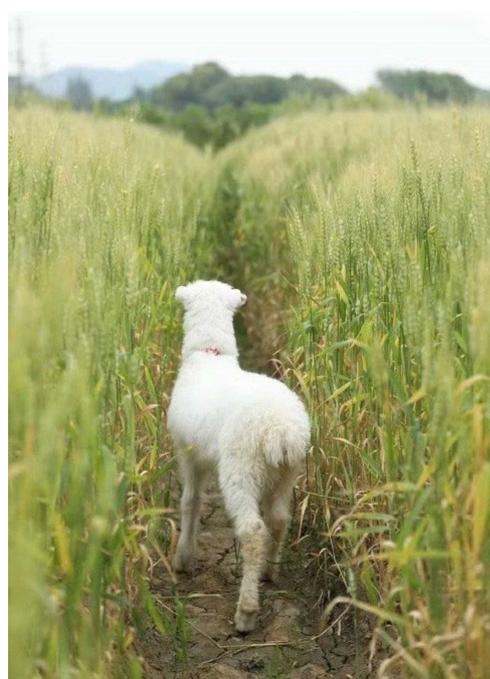
安らかに。

少年たちは皆静かに、敦一が気を取り直すまで見守っていました。

「帰ろうか。」と、やっと言葉にできた敦一は先に歩き出しました。

こんな夜の嵐はいつまで続くのかと思いきや、病院を出た瞬間、雨も風もピタリと止みました。敦一はしばらく夜空を眺めると、目を細めてにこりと笑いました。

「晴天ちゃん、やるね。」



## (7) 麦芒

仲夏の候、小麦畑はすっかり黄金色に染まり、小麦は頭を垂れていました。後陡門 58 号での生活は、時間の流れが感じられないほど穏やかでしたが、

半年間の畑生活をした少年たちは、ようやく実り豊かな季節を迎えました。

上空には、久しぶりに文字が現れました。

「いや、ご苦労様でした。大変よくできました。さあ収穫祭の麦畑コンサートを開催したまえ！」

小麦畑に囲まれた平地には、小さな舞台ができていました。

「うわあ。」少年たちはわくわくしていました。

「わん。」犬たちもわくわくしていました。

心を込めたパフォーマンスを披露した少年たちは、大声でこう歌いました。

『渺小得像麦芒（麦芒のようにちっぽけな少年）

梦却做得浩荡（大きな夢を見ている）

他仍是种子（まだ種である少年は）

他总要生长（いずれ成長していく）

少年满身泥浆（泥まみれでいながら）

眼神依旧清亮（冴えた目つきの少年）

他两手空空（両手は空っぽだけど）

只是心怀热望（胸は熱望にあふれる）』

その歌詞に、小麦畑はメロディーに乗って身を揺らして、答えてくれているかのような様子でした。

すると最後に楽音がおさまった瞬間、麦畑は大きなコンサートホールに一変し、万人の歓声が滂沱のように起こり、少年たちは手をつないで歓声を浴びていました。

観客に向かって丁寧にお辞儀をした少年たちの目には、また別の風景が映っているようでした。



ああ、なるほど。もう新農人になって3年目の春だなあ。

2025年2月24日、少年たちの「未来を種蒔きする<sup>2</sup>」をテーマにしたコンサートツアーのファイナルを迎えました。

福州はうちの麦畑より南なのに、まだまだ肌寒くてさあ。

敦一はあれこれと考えながら、代表として感謝の言葉を述べました。

「あっという間に消えていくものはというクイズの答えは、時間です。

過去2年間の畑生活は夢のように、苦労した記憶も曖昧になってしまいましたが、晴天ちゃんのことだけは今になってもはっきりと覚えています。

晴天ちゃんがもし生きているなら、そろそろ3歳になる頃です。」

最後のお辞儀をして、楽屋に戻った少年たちはお疲れさまと言わんばかりに目を合わせると、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

歓声はまだまだ聞こえてきていました。

新農人になる前には、今日という日が来るとは一切思ってはなかったはず。

様々な農産物を作り、農業会社も起業し、自身のブランドを持つようになるほど産業を盛んにし、コンサートまで開催し、たくさんの人に愛されるとは、思いがけないことばかりの2年間でした。

それは夢なのか現実なのか、常に確かめたいくらい嬉しくて不安で、不安で嬉しくて、気持ちのローラーコースターでした。

2年間のうち、後陡門58号にも色々と変化が訪れてきました。晴天ちゃんが生まれた羊小屋もなくなって、フラワーハウスも大きく修繕されました。

それにしても、変わらないものはあります。

『肝心なことは目では見えない』というように、土地に対する少年たちの熱意は変わらず、目では見えないにも関わらず、その凛とした後ろ姿から伝わってきます。

「戻ろうか。」

愛しい場所に、走って戻ります。

麦芒が揺らぐユートピアに、後陡門58号に。

少年たち、走れ！



<sup>2</sup> “种下一个未来（未来を種まきする）”という十人の少年のコンサートツアー。

## (8) あとがき

私が寄稿する令和6年度国際交流員通信は、本号で最終回を迎えました。

国際交流員としての仕事も、本号の寄稿で締めくくることがとなります。

2024年4月10日、下関市に着いたときは、下関市はどんな街なのか、これからどんな仕事をするか、国際課はどんな感じなのかと、楽しみと不安な気持ちが入り混じってわくわくどきどきしていました。

まるで、はじめて後陡門58号の畑に着いた少年たちのようでした。

桜の開花が早かった去年の春、就任して早々の仕事は、フランスからのクルーズ客船の通訳ボランティアでした。港湾局と下関市コンベンション協会の仲間たちと一緒に、スムーズに最初の仕事を遂げた達成感は、少年たちが水田の水稲を全部収穫したときと同じくらいだろうと思います。

その後、次々と新たな挑戦に向き合いました。

中国語・中国文化講座。

5月下旬の開講を前に、誰に、何を、どうやって、という三連問を抱きながら、こつこつと自己流のレジュメを作成した4月と5月でした。ピンイン・文法・文化と社会・応用の四つをテーマにしたレジュメを50回以上用意して、講座に臨みました。

講座に来られた市民は皆優しく、中国語と中国文化に対して熱い好奇心を持ってくださった方でしたので、毎週の火曜日、講座の日は一番の楽しみでしたが、やはり時には不安な思いもありました。

もっと何かできるかと、たまには眠れないほど考えた日もありました。その時、少年たちが農業の悩み事をなんとかして克服したという場面のおかげで、ほっとしました。

### 中国の伝統祝日（中国的传统节日）

#### 三、清明節（清明节）

1. 日付：基本的には4月の3日・4日・5日のいずれ。

#### 2. 伝統行事

##### 1) 扫墓（お墓参り）

お墓参りをする。お墓をきれいに掃除し、花や果物など供え物をお墓の前に並ぶ。

##### 2) 登山

中国の墓地は基本的に山の奥か郊外にあるので、お墓参りついでに、登山して春景色を楽しむこともできる。また、柳の樹を植えたりもする。

##### 3) 放风筝（風揚げ）

風を揚げる。風は「紙鸢（紙製の鷹）」ともいう。

##### 4) 荡秋千（ブランコに乗る）

ブランコに乗る。



### 四大名著の『西遊記』（四大名著之《西遊記》）

#### 一、四大名著（四大名著）

《水滸傳》	施耐庵	元末明初	梁山好汉 (108)
《三國演義》	羅貫中	元末明初	三國鼎立（魏蜀吳）
《西遊記》	吳承恩	明	西天取经（唐僧、孫悟空）
《紅樓夢》	曹雪芹	清	林黛玉、賈宝玉



#### 二、《西遊記》（『西遊記』）

【あらすじ】 唐僧・三蔵法師が白馬・玉龍に乗って三神仙（神通力を持った仙人）の孫悟空、猪八戒、沙悟浄を供に従え、幾多の苦難（81難）を乗り越え天竺へ取経を目指す物語。

自分も必ずそれを克服するからと。

そして私が就任期間中の一番大きな行事を迎えました。

青島市と下関市友好都市締結 45 周年レセプション。

はじめての公式文書翻訳、はじめての公式場面での通訳担当(しかも市長!)、はじめての青島出張(出身地への出張はなかなかないですね)など、はじめての連続でした。

ばたばたの1週間でしたが、周りの皆の協力と応援のおかげで、何とか乗り越えることができました。嵐のように震えていた私の心も、出張が終わった瞬間、晴天が訪ねてくれました。

やるね、晴天ちゃん。

他にも、総領事館訪問、小学生の出前講座、小学生中国派遣団の事前研修、海響マラソン、リトル釜山フェスタ、多文化共生下関塾、多文化防災シンポジウム、日本語弁論大会下関市長賞受賞者来訪など、色々と貴重な経験をさせていただきました。

日本語を勉強し始めてから、日本に関する面接にあたってはいつも「中日の架け橋になりたい」という夢を語り続けてきましたが、国際交流員になってやっと夢が叶えられたような気はしました。

しかし、こんなちっぽけな私は中日の架け橋になれたと言えるのでしょうか。こんな大きな夢を見てもいいのでしょうか。

不安に思うなか、少年たちの歌は遠くから聞こえてきました。

『渺小得像麦芒（麦芒のようにちっぽけな少年）

梦却做得浩荡（大きな夢を見ている）

他仍是种子（まだ種である少年は）

他总要生长（いずれ成長していく）

少年满身泥浆（泥まみれでいながら）

眼神依旧清亮（冴えた目つきの少年）

他两手空空（両手は空っぽだけど）

只是心怀热望（胸は熱望にあふれる）』

すると、目の前に広がる広大な黄金色の小麦畑が、『肝心なことは目では見

えない』と言わんばかりに、ゆらゆらと揺れていました。

少年たちと注文の多い土地との物語は、今年で最後の1年を迎えました。

そして私の下関市国際交流員としての物語も、最後を迎えました。

さて、

下関市に。

下関市民に。

下関市役所の皆様、特に国際課の皆様に。

国際交流員の仲間たちに。

十人の少年に。

小麦畑に。

晴天ちゃんに。

火の山公園の満開の桜に。

角島の青い海に。

赤間神宮の茂った松の木に。

お伝えしたい言葉があります。

大変お世話になりました。

ずっと応援して下さい、最後までお読みいただきありがとうございました。

心より感謝の意を申し上げます。

また、青島か下関か、この世界のどこかで、お会いしましょう！

以上、あとがきという名の、離任のご挨拶でした。



【つづかない】